

伊敷千代さん 三所帯中 二所帯全滅
伊敷親助さん 四所帯中 一所帯全滅
一家全滅所帯 四十五戸

百五十四家族中、人物犠牲が無かったのは三所帯で、百五十一所帯は全部犠牲を出している。

金城亀二さんの家族犠牲を掲げる。

妻、長男、三男、四男。

したがって生存したのはご本人と次男と長女の三人だけ。

遺骨収集は総動員で二日かかったが、大体米軍が片づけてあった。それでも一屋敷平均六体あり、三十柱の遺骨のある屋敷もあった。木の蔭、四辻、道等にも遺骨は残っていた。

芳魂の塔、避難民の遺骨を納めた。

一人の老いた婦人が、捕虜になるについての日本軍のデマ宣伝の恐怖から、与座部落が焼かれた際は、燃えている自分の家へ飛び込んで死んだことが語られたが、その孫の少年も祖母を追うてまさに飛び込もうとするのを人に止められたが、この少年は、現在は、琉球電信電話公社に勤務しているとみんなが話した。

金城亀二さんの訴え。

戦争だけはあつてはならない。戦争は是非なくするようにして下さい。戦争をないようにして下さい。

同じことを感情をこめて何度も繰り返した。七人家族から四名の肉親を失った金城さんの訴えは、個人的悲しみをさらに越えた人類的素朴の感情である。

与座部落も戦後二十余年に立ち直っているが、交通はやや不便

時は、木の下の水は飲まないで、太陽の当たっているところの水を飲みなさいと言っておったんですが、水は上から流れて来るし、どこで飲むでも同じだろうと思って、飲んでいたんです。

食糧問題は、大変なことで、芋を掘り取ったあとに、小さい取り落した小指くらいのものを拾って来て、子供たちは、それをお箸の先きで突き通して食べさせるんですが、これでも三つくらい、おまけにこれを煮た水までも飲んだんです。この掘り取ったあとに残っている小さい芋拾いは、一里以上も歩いて、名護あたりまで、試験場の上あたりまで行かないとない芋芋ですから。人が、何回も掘って取ったあとの畑ばかりですから、食糧には相当に苦労しました。

それから潮水を汲んで来て、一晩中煮て、ようやく五合くらいの塩をつくって、これを部落へ持って行って、食糧と交換することもありました。しかしその潮水はにがいですなあ、それを入れて何か煮たら真黒くなるんですよ。

それから部落の方でも、豚や山羊など、種子に残しておいたら、兵隊に取られて、家畜も全然いなくなっているといっていましたよ。

マラリヤは、戦争当時の七月までは無かったですよ。終戦ってからマラリヤは出たんです。アメリカがマラリヤ菌を撒いたという噂さがありました。自分等は七月の下旬に山の中から出たんです、山の中では蚊にも刺されたが、マラリヤは無かったです。

最初は大豆味に疎開しましたので、四月に大豆味の産業組合から米の配給を一人一合あてに一回貰ったきり、今でいえば農業組合です、倉庫に米は入ってなかったはず。倉庫を焼夷弾で焼かれ

である。しかしわれわれは八時にいいあんばいに車があって、二十四年前のこの惨劇の土地を後にして帰郷の途についた。

伊敷親助(三十二歳) 疎開引率

大川部落は瀬高から約半里(二キロメートル)離れていますが、塩が無くなったもんですから、瓶をさがして、これを四つ束にして担いで、アメリカは朝の八時頃から来るので、早起きして、潮水を汲みに海に行つて、そうして潮水を汲んで来るんです。瓶は一升瓶もあれば四合瓶もあります。集められるだけ集めて行くんです。この潮水を調味料にして、何でも食べるわけです。

食べ物互に、何か物がぶつ交換も行なわれました。そして食糧は、朝早く行つたら、海の浮草がありました、それを取って来て、茹でて食べるんですよ。爆弾や砲弾には追い廻わされませんでした、食糧には酷く困つて、子供なんかは、もうふらふらして、鳥目といえます。また子供なんかは栄養失調になって、腹も膨れて、手足なんかも膨れて。

そうして防衛隊なんかも、食い物が無かつたんでしような、山の奥の仮小屋に二人で死んでいるのを見ましたよ。そんなのを二、三か所で見ましたが、食糧難と病気だつたと思います。この部落のもので栄養失調は出ましたが、水が体に合わなかつたのですか、赤痢が流行りました。山の大きな木の下ですから、太陽なんか見えなんですよ。それで赤痢で腹をこわして相当死にました。水をガブガブ飲むもんですから。そうして向こうの人が言うには、水を飲む

たので配給は何もなかったんです。もう食いのばしで、自分の持っているもので、お粥なんかは、まるで水みたいなので、それから木の葉、桑の葉なんかに入れておじやもやるんですが、これも水みたいに薄いのをすすります。四月の半ば頃からはその生活です。山の中から食べられる草の葉もないんです。食糧をこちからそう持って行かなかつたんですよ。着のみ着のまま、自分たちで持つるだけですからね。子供もつれてるし、着物ももっているし、食糧は沢山持てないですよ。

米は村では準備してありましたが持つことはできませんでした。おかしなことは、釜が村から配給あつたのは十一箇でしたがね、これは乗せるために束にしてあるものが、乗せる時に、べしやんに割れてしまつてですな、乗せられなかつたんですよ。そうして、真栄里の徳里金盛さんも班長でしたから、徳里さんから三個借りてですな、ようやく、順繰りぐり式で炊いておつたんですが、また飯盒も持っているし、それで七名の家族が飯盒に炊いて、移してはまた炊いた。

そうして終戦になつてこちから来てから金盛さんから、その釜を返せといつてですよ、それは新平良小(屋号)のお母さんが借りたのであつたが、あの人は、お米五合を御飯炊いたら、それが兵隊にさらわれたですな、お釜が無くなって、ないんですよ、もうこれは戦争中のことで、返せといつても無いのだから返せないの笑い話になつてしまいがね。

五月、六月、七月の三か月というのは、ほとんど飯らしい飯はなく、食べ物とかがして、一日一食あれば、それはいい方です。そ

れから向こうの人から蘇鉄ですな、蘇鉄で澱粉を作って、飢えを凌いでおったんです。蘇鉄は六月なってからだったと思うんですが、その前までは、ミザーといってですな、芋を掘った後に少しずつ落としたりのがまた生えるんです。それをさがして飢えを凌いでおった。山の段段畑ですが、これを十回くらいあさるんですが、必ず出るんですよ、十個くらいは。

みんな朝は早起きしてミザーさがしに行くんですが、大きい方が小指くらい、子供たちにこれをお箸に突きさしてやるんですが、大人は、潮水を汲んで来て水と交ぜて飲むんです。芋を煮た水も飲みます。このミザー芋を少し多いと計算して、二日分にするとか、三日分に分けるとかですな。雨天なったらさがしに行くことができない。これも無くなったのは五月の中旬頃。久志の瀬嵩から入って大川という部落です。蘇鉄の澱粉づくりを向こうで教わったわけです。それで二回中毒しました。山川といううちにおりましたので、向こうのおじいさんが、豚脂少しとニンニクを砕いてお湯をかけて飲ますんです。あとは馴れて中毒しなくなりました。そうしてですな、蘇鉄を食ったら体がまっ黒くなるんです。大人でも膨れるんです、顔でも手でも足でもすべて。蘇鉄を木片みたいに切ったキーカーラーといいますが、あれも食べました。キーカーラーも作るんですが、あれは脂を相当に入れないと食べられたものではありませんな。あっちの人がつくるとうまかったんです。それでこの蘇鉄を取るにも喧嘩してですな、蛇も餌も取り上げられましたよ。蘇鉄の幹を四つ取ってあったが、それも奪い取られて、泣く泣く帰ったよ。そ

からまた蛙ですな、あれはうまいです。それから鳥がですな、蛇を取ったあとで逃がしたものを煎じて食べたんですが、鳥が蛇を取るのには面白いですよ。雌が喰べて上にあがるんですよ。雄の鳥は下におるんですよ。雌の鳥が落とすと、下に待っている雄の鳥がすかさず喰べて飛び上って落すんです。これを三、四回したら青大将は死んでしまいます。ハブは津波の杉山で見ましたが猛毒ですからね、一人はおりますよ、咬まれたのが。杉山はあんまり見ませんでした。お医者さんは三里半ばかり行かねばおられませんでしたし、血清もありませんしな。

山原では栄養失調が大分出ましたな。ミザー芋を集めて置くとか兵隊が、切り込みに出るといので、その芋を取りに来るんですよ。また一週間ばかりしたら切り込みしたといつてまた来るんですよ。それからもう馴れてしまいました、夜もろくろく寝られないんですよ。蘇鉄を食べるようにしてあるものを、夜眠っている時に兵隊たちが取るんです。何回もそんなにして盗られたんです、籠もるとともに。蓋バークというのがありましたね、あれに入れて置くとかそれごと取って行ったんです。

金城 亀 二(三十歳) 第二期防衛隊

わたしは二回目の防衛召集で、第一回の人たちは東風平の記念運動場に入りましたが、わたしは兼城村の照屋部落の船舶特攻隊の大隊の第三中隊に防衛召集されて、向こうでも班長を勤めておりました。

れで、私のいたうちのおじいさんに言ったら、あっちは、大変なところだもの、あっちへ行ったらそんなに会わされるよといわれました。わたしは、島尻では、蘇鉄は掘り捨てるのに困るくらいですよ、と話ししたら、あんなところに行つて、奪い取られて気の毒でした。後にはもう種子切れになったと言われておったんですよ。久志村の大川部落では、また稲もですな、すくすくのびつつある稲を、すべて刈りてしまったんです。避難民と部落の人と奪い合いですよ。また実が固まらない乳みないものですが、それをもぎ取って、煎じて飲むんです。相当食糧難には苦労しましたよ。弾や爆弾なんかではやられた人はいませんでした。稲は、もうしばらくすると米に固まるんだが、あっちは一期作ですから五月頃(旧暦らしい)でしたからなあ。もう少し実のつたら取れるがなあ、と那覇あたりの人はよくわかっていたらいいですな、同じ栄養だから、乳のようにまだ固まらない実のらない青いのを煎じて飲むんですな。

それから今那覇なんかの庭に植えるヘゴですな、あのしんを食べましたが大根のようですな、桑の葉は食べましたがあれはいい方で、食べられるものは全部食べました。パイヤの幹なんかも食べましたが、一つだけは食べられないのがありましたよ。あっちの人が教えましたが、里芋に似たものがあります、あれだけは芋も葉や茎も食べられません。口が痒くてはれてどうにもならないそうです。それであれだけは食べませんでした。

それから笹を作つてですな、一日中川の中からすくつて取れば、桜エビ(沖縄方言で「セー小」)が五合くらいは取れました。それ

最初は分散して個人の家にお世話になりました。点呼は照屋部落の公民館の前で受けておりました。夜は艦砲、昼は機銃掃射が激しいので、船舶隊の仕事は、午後五時頃から真栄里の後の防空壕で昼は整備をして、晩に海岸まで出すことになりました。うちの中隊は、線路を引いてあったんですが、爆撃が激しくて、昼はほとんどやられっぱなしで、晩に補修工事として、木の枝を切つて来て擬装してあるんですが、低空で偵察するからすぐ見破られてしまうんですよ。しよっちゅうやられて、線路を補修してまた擬装するんですよ。船は海の深さは一メートルくらいのところまで出しますが、干潮の場合は、糸満の海岸は、一里くらいまで干上りますから、夜通し担いで、肩はほとんどはげておったんです。船舶隊の下士官の方はちよつとのことでも鞭でたたかれましたよ。肩が痛くて坐つたら、またたたかれましたよ、だから我慢して歯をくいしばつてです、海の潮のあるところまで担いで行くのですが、爆雷は船尾に詰めるんです。これは三名で担ぐんです。一つの特攻船に二個ずつ詰めます。船舶隊はほとんど下士官だったです。目の前には、前の方に大型で戦艦のような、真中に駆逐艦、ずつと後の方は橋だけしか見えませんでしたよ、輸送船団は。

そうしてこの船舶特攻隊は、巧いこというんですな、実際面では全く効果はないんですが、大きな法螺を吹いてですね、今日は戦艦を撃沈させたなどいって、朝がたに帰って来るんですな。

この船を線路上に上げることもできない、水がいっぱい入っています、船体は、ベニヤですから、底を突きほがして水を流してからまた担いで線路まで持つて行って、それから防空壕に持つて行って

避難させる、そればかり毎夜繰り返しておるんです。それでわたしたちは線路も修繕して擬装したり、舟艇も修繕したり、そうするうちに暗くなりますね。この舟艇は毎日来なくなりません。毎日減る一方ですよ。十五隻だったですがね、うちの中隊が。二中隊は真栗里部落の壕で、一中隊が小波蔵だったですが、二中隊の方はわたしたちは羨ましいと思いました。向こうは、特攻隊の舟艇はタイヤー付きでありましたから、干潮の時も押して行きますからね、ここは命令で担いでですよ。

後では舟艇が無くなりました。最初は出て行って帰って来ましたが、今度は、逆上陸させて、読谷の飛行場を取り返すといつて、読谷の飛行場はアメリカに占領されているでしょう。それで糸満の刎舟をですね、毎晩四名で一隻ずつ、豊見城村のタングムイ(この池は、川の幅が広がって池のようになっていたようで、これも船舶特攻隊基地で、別の記録に出る。真栗里からこのタングムイまでは、十数キロメートルの距離で、現在豊見城村役所や学校のある三叉路から、真玉橋に行くアスファルト路を下りて行くと高安部落の前に橋があり、橋から三十メートル程行って「西方」へついている農道の突き当りが、タングムイとのこと。艦砲やいろいろの弾の降る中を、重い刎舟を四名一組で運ばされたら(しい)まで担いで、向こうの高安の部落の前に橋がありましてね、そこを担いで歩かれないもんですから、よいっしょい、よいっしょいで、これは大変難儀しました。この刎舟は棒に釣して左右で担ぐんですが、この刎舟運びは、十日以上もつづきましたよ。重いけれども四名で持てました。海に浮べたままなら四名では持てませんが、浜辺へ上げて乾燥さ

向こうの壕に避難しましたがね、その場合の戦争の激しさ、そこでの小隊の働き方は、ほんとに涙が出おったです。向こうの壕は二一ですが、壕の中も土が落ちましたよ。兵隊は、裸になって焼皿鉛を上に置いて防いでいたがね。弾は小さいが効力がある、遠くまで行きますよ。しかしどんどん押されてましたね。

松川までの弾運びは一週間くらいつづけたらだるうと思うんですがね。それから糸数の自然壕に移動しましたがね、向こうには野戦病院がありましたよ、向うからも首里の識名ですな。松川は終わって、識名への輸送もわずか一週間くらいですよ。わたしたちが輸送する場合は、首里からの重傷患者は歩けるものは歩いてですね、雨が降って膝までぬかりましたからね、歩くことのできなないのは匍って首里の戦線から後方へ下っておったんですがね、戦友にすがっているもの、わたしたちは弾薬を担ぐんですから、患者の後退に協力することではできなかったんです。その頃は、住民は南部へ避難して重傷患者ばかりです。その後は転々と長い間あちこち移動して歩きました。糸数からは、新城の前の大屯原屋取りですかね、そこにも一週間くらいいました。糸数にいた時に首里は占領されました。

佐敷村・玉城村と知念村は戦闘しないですよ、安全地帯ということで。それでその時に、山部隊の師団長は、やっぱりあちこちはいいな、家族がいるならあちこち避難させなさい、向こうは安全だからといわれました。その時僕も痛感しました。

新城と具志頭との中間ですがね、そこからは東海岸が見えますが、その時からは旅団司令部は、具志頭に移動していましたよ。そ

せて置いて担ぎました。勝手に盗んで持って行きましたが、盗むといつても放つたらかして主は皆避難しているんです。しかし、沢山の刎舟でしたが、これは何もありませんでした(戦前の糸満は刎舟が生業の元手で、百をもつて数えるほど、刎舟はあったらう)。刎舟は監視もいらないから自由勝手に取りたいほうだと思います。船舶特攻隊は駄目になりましたから、今度は弾薬輸送隊に配属になりました。東風平村の友寄ですね、山川の近くですね。

わたしの中隊は百五十名くらいです。三個小隊で一中隊で、一個小隊は五十名くらいでしたからね、それが編成替されて、各部隊に配属されたわけです。それまでは、中隊の人員にはほとんど損害はありませんでした。十名、十四、五名と、与那原や佐敷などに配属されて、別れてしまいました。わたしは友寄部落に配属されました。船舶隊というのはほとんど何もならなくて、全滅したので、仕事がなくなつて輸送隊になったんです。友寄に行ったのは四十名くらいの人数でした。

友寄から首里坂下の松川ですね、首里の戦線はあの当時から首里は包囲されてですね、時間の問題であつたんです。南部から行けるところは、樋川のところで、今の沖大のところの国場の農道との二つしかなかったんですよ。もう敵は安里まで来ていたんですよ。果鉄の土手を境に、そこはもう第一線になつています。

友寄からの弾薬運搬は、首里の松川ですか、国場を通つて、国場の後から、真和志の農業組合ですが、その付近はほとんど畑だったですからね、甘蔗畑。毎晩一回ずつそこへ運搬するんです。一晩で帰るだけけれども帰れない場合もあります。夜が明けた場合には、

こちら毎晩一回ずつ、具志頭の旅団本部にですね、仲座の前に自然壕があつたんですが、そこへ弾薬輸送、食糧輸送やつたですがな、新城の西がわの窪地に沢山弾薬が集積されてありましたがね。その場合にうちの防衛中隊の軍曹が国頭シンセイといつて予備役だったですがね、下士官だったんですが、それが弾薬を受領してですね、野砲隊の曹長と二人いっしょにやられてしまったですね。

ちょうど弾薬を受領した時は大雨が降つたもんですから、少し雨を霽らしてから輸送しようではないかといつて二か所にわかれて、個人の空家で火を燃やしてですね、話しながら休んでいました。わたしは班長で、機関セイ久といつて死んでしまつたが、あれは二班の班長で、独断できめて、話合つて、そこで休んでおつた。そこは艦砲が激しかったが、わたしたちがおるところは、ちよつと離れておつたんですよ、二人がいるところは。壁をぶっこわしてですね、足が切断されているんですよ、軍曹はまたお臂の肉を一斤位破片で削り取られているんですよ。軍曹がやられているから、出て来い野戦病院へ運んで行くからというんだが、みんな隠れて出て来ないんですよ、戸をはずして来て応急担架を二つ造つたですよ。曹長は、担架も何もないから、銃で早く撃つてくれというので、いや大丈夫ですからしつかりして下さい、といつて、それで打ち合して半分は患者を運搬して、入院させなさい。半分は弾薬輸送というふうにしましたがね。

この二人を富盛の野戦病院に運んだですよ。その時は激しくてですね、道という道はほとんど重傷兵から避難民、死人、とくに気の毒に思つたのは若い母親がやられてしまつて、子供がすがりついて

泣いているんですね。わたくしも大きな責任があるからどうするともできない。そうして両隊長を病院にお願ひしたら、そこはほとんど真壁に移動してしまつて、残留部隊しかない、応急手当医療しかできない。瓦に角、応急手当をやってくれといったが、薬品も道具もないからできない、というんです。

それからわたしたちが山城に行った時はガジマルなんか全部倒れておつたですよ。だから、どの道が通れるかわからないので、案内者を出して、橋があるか、どの道が通れるか、夜だからさがさせて確かませてから行ったんです。しかし急げば急ぐほどどうにもならんといつたぐあいでしたが、その隊長のお宅の前に来てですね、訊いたんですが何の連絡もないが、まあうなつているから早く病院につれて行けということ、病院に行つたらもうびっくりしたです。戦闘力はもう無いなと思ひました。患者は蚤棚みたいなところにぎっしり詰つて、軍医やら看護婦やら汗びっしょりですね。てんでこ舞で、応急処置なんかなかなか頼んでもしてくれせんよ。

註、日本軍の惨憺たる状況がいろいろ語られるが、これは主として軍閥係だから中略する。

真栄平の部落でうちのお母さんにあひましてね、僕の四男坊がちょうど六か月になっていましたがなあ、肩をやられたというんでお母さんが負んぶしておりました。一回は捕虜になつたそうですがね。そこに食糧があるから食糧を取つて来るといつて嘘を吐いて真栄平に逃げて来たとお母さんは話されていましたが、じや家族はどうしたんですかと訊いたら、一人はやられたという。じやあ残りはどうしたか、と訊いたら、一回は照屋に難避して向こうから賀敷に

いしましたが、何でもないもんだから一生懸命さがしましたが、さがすことができませんでした。伊敷君のお母さんがおられたが、向こうにも壕という壕は無いんですよ。足は出して頭だけは隠してしましたよ。

わたしたちはそこで防衛隊を解散なつたものが八名いっしょになりましたので、四人ずつ二つに分れて、国頭へ突破しようという相談をしました。糸満へ突破すれば海から国頭へ突破できると考えました。

そうして伊敷へ出ることにしたら、糸満の海は、アメリカのいろいろの船が、まるで海を破りようといっぱいしているのです。そうして、それでも糸満へ突破しようとしたんですが、アメリカの戦車はわたくしたちを見ても何もしませんでした。却つて友軍の兵隊が、スパイといつて殺そうという気配が感じられました。これは突破するのも考え問題だと思つて、阿檀葉の中、伊敷からの水の流れない川があるでしょう、そこで焼け甘蔗で橋を架けて糸満の海を見なわけです。

それで、避難民は殺さないという話を聞いていたので、堂どうと手を上げて行こうということにしました。その時、十時頃になつていたですか、中城の女たちが、着物包を頭に載せて、女が四、五名、子供が七、八名ぐらゐり行き合つたんですが、どこへあなたちは行くかといつたら喜屋武に行くという。喜屋武は、片一方は絶壁で激しいから、こつちを突破しようではないか、糸満を突破すれば大丈夫だから、食糧は何とかして行くからいっしょに行こうではないかといつた。着換えなんか持つていない、食糧しか持つて

帰つたら、また賀敷も焼かれた。また今度は米軍が与座まで侵入して来てですね、とうとう二回目の避難の場合にもう家族はちりじりばらばらになつたという。それで長男は三男を負んぶしてですね、おじいさんが先頭になつて、いたそうです。

註、照屋から逆に、賀敷へ戻つて、そこから与座の方へ行き、与座から真栄平へ行く途中、ちりじりになつたということのようである。

お母さんがいるといつてどうしてわかつたかという、東^{あがり}イントの暗闇川ですね、向こうから、水を桶に担いで二、三名来つたですよ。その人たちはわたしの部落の出身だったので訊いたら「あなたのお母さん、乳飲み子を抱かえて、部落の北がわのガジマルの木の下にいられたよ」という。わたしは逃げて家族といっしょになるうと思つたが、本部の兵隊が計さないわけですよ。

それで止むなく国吉へ行つたら、向こうはもう、何にもないですよ、ガジマルなんか倒れてですね、そうして国吉から帰つて来たら解散なつたもんですから、本部の方がたを前にして、東がわのテッペンに、行つたんですが、解散になつたもんだから、もうおしまいだなど、今までの期待が水の泡になつたなと思ひました。でも食糧もないのですから一日も早く終つた方がいい、と勝つても負けても、そういうふうな考えでありました。

わたしは真壁に行きましたが、あんまり激しいもんだから、今度は田原（真栄里の屋取り、真壁の方向）の方に行つたんですがね。そこに妹がおるといので捜したんですが、その途中で至近弾を喰つてですね、艦砲で土を体全体に被せられて、もうお終いだと思

ないというので、そんならいいから、あなたの方の子供をわたしたちが負んぶしようといつて軍服を着たまま、途中に水があつたので、水も飲んで、腹いっぱい水も飲みなさいといつて、水も飲ましたんですよ。

ところが糸満の南に来たらライトで迎えて殺すどころではなかつたですよ。すべて日本語ですな、あなたたちは避難民だな、とちよつとした訊問を受けました。

白銀堂の北がわにトラックが待つていたらしい。そこで、中城の女たちにあなた方は、わたくしたちを殺させるためにつれて来たんだな、といわれましたよ。

わたしたち四人は防衛隊でしたから、翌日からはジープを洗わされたり一日中使役です。小便に行くにも鉄砲をつきつけてついて来るんですよ。逃げるんではなからうかということでしょう、言葉が通じないので手真似ですが、前からも後からもカービン銃を構えているんですよ、殺す考えだな、という心配も出ました。

それから避難民が殖えたので、トラックに乗せて、嘉手納の野原ですな、そこへ連れられて行つたんです。そうしたら驚きましたのは、名城でわれわれを殴つて船を担がした船舶特攻隊の下士官の連中がうろろしてほとんど全部いましたよ。行つて帰らなかつた連中です。敵の戦艦を撃沈させたといつていた連中が、真先きになつていたわけですよ。しゃくにさわりました。こつちは一生懸命協力して上げたのと思つてですね、肩がこれくらいわたくしははげていました。涙も出なかつたですよ、馬鹿らしくてね、もう少し早く放免なつていた方がよかつた。もっと避難民も助けて上げておけば

よかった、あんな苦しいみじめな生き方をして、と思いました。
それから屋敷へ行きました。大きな木をブルトウザーで根本から
引っくり返すのを見て驚きました。

それからまた野国に引返ししましたが、その時は、全員が栄養失
調になっていました。海には一万トン級の船が三隻ですね、沖に碇
船しておるんですよ、三千名でしたが、舟艇から向こうまで運ん
で、わたしたちは中間にいる船でした。そこでロップ梯子ですね、
折たたみ式でしたが、元気なものは自分であれから上って、われわ
れは栄養失調になっているもんだから、上ることができないで、船
から番を下して、荷物を積むようにして乗せられました。それから
十一日目にハワイへ着きました。一番目の船は大変サーピスがよか
ったようです。あれはランニングもパンツも配給されて、わたした
ちはパンツの配給がありません。三番目の船は、真裸だったそう
です。

ご飯は、握り飯も、大抵携帯食糧で、三度ほど握りの半分くら
い赤飯もありました。それから腋の毛ですね、白い毛虱がついてい
るもんですから下の方も剃ったんですね。

日課としては、ですね、毎日二時間作業するんです。ゲンノード
銷落しは銷落し、タワシで磨くのは磨く。ペンキ塗りはペンキを塗
ってですね、十一日間で見違える程船は綺麗になっていました。裸
だもんですからね、足が痛くて、船尾へ行って、食糧品を入れた箱
の板を持って来て、それを敷いて磨いたり、ペンキ塗りしたり、錆
を落させたりさせられました。また潮水で、洗濯石鹸を小さく切っ

伊敷千代(二十三歳) 軍炊事

昭和十九年でしたが、武部隊がこの部落に配置になって、字の事
務所に宿を取っていました。そうして、今米軍が使っているところ
の下に竈を作って、炊事場があったんです。

うちは子供が二つしかありませんでしたので、一日おきに飯炊き
に行ったんです。飯は、米五合で芋はその二倍くらい入れて芋飯だ
ったんです。将校もみんな同じものだったんです。それを大きなお
握りをつくって一個ずつだったんです。それを箆に入れて、またお
汁は野菜とか何とか住民が供出したものを入れて、炊いて、また糸
満から魚と肉が配給とあってあったんです。今日は魚、あしたは
肉と違って交代だったんですよ。ところが兵隊の習慣か知りません
が炊事班長とって、上等兵、兵長くらいがやっておって、その手
伝いだったんですよ、わたしたちは。この炊事班長たちは、肉もい
いところは自分で取って置いて、また魚も来れば其中の方は取って
置いて、それから配給して炊きおったんですよ。それから飯もお芋
は入れないでお米ばかり飯盒で銀飯を炊いていたんですよ。将校だ
って芋飯ですが、お汁は小さい味噌梅に何名分とって入れて持つ
て行くんですよ。それで陣地は山の中ですから、荷車みたいなのに
乗せて、ガラガラ引張って行くんですよ、四、五十人分。でこぼ
この水なんかの溜ったところなんかをガラガラ引張って行くんで
すよ。それがでこぼこの道を上るので、最初はいっぱい入っている
が、目的地的につくまでには、半分しかないんです。それで初年兵

でそれで洗わずんです。いくら船酔しているものでも見逃がさ
ないです、重傷患者以外は。船酔くらは見逃がさないです。ホ
ースで潮水をかけて毎日浴びせるんです。サイパンでちよっと碇船
しましたが吃驚しましたな。あれだけ撃沈させたといっただのにアメ
リカの船団見たら吃驚しました。それを見たなら日本の宣伝はまるっ
きり嘘だったなと吃驚しました。

真珠湾は、どうい風に入ったかわかりませんでした。奥の方
に碇船している船団もいっぱいしておるし、航空母艦はギッシリ飛
行機をつんでおるし、これではどうしても勝ち目はなかったな、と
思っ、早く終戦なればこんなに犠牲者は出ないですんだのにと思
いました。

向こうで、そのまま裸になって棧橋からは、百名乗りの機械力の
大型のはしこには吃驚したですよ。十名くらいで、三十名くらい
の捕虜を、三か所に収容して、背中には大きなPWの字を書いた服
にかえさせられたですね。向こうへ行って聞いたら三番目の船は
酷かったらしいですよ。食糧上げ下げするロップも便所のロップ一
つだったらしいですよ。収容所は三度移動させられた。最初は山で
したが、向こうの防空壕はまるで御殿(貴族の家の意)みたいで、
ペンキも塗ってあるし、鉄道線路も敷いてあるし、電気も点ってお
るし、水道も入っておるし吃驚しました。

わたくしは一年六か月あっちにいました。若いのは早く帰ってわ
たしたち年とった方は遅く帰されました。

ハワイで与座だけは部落がないと聞いていました。

などは、腹半分も食べない有様でした。
それをくり返しているうちに、武部隊は、行って、そのあとに山
部隊が来てこの陣地を引きつい、作り上げましたよ。
それから昭和二十年三月二十三日に、戦争が始まりました。義理
の弟が十一歳で、わたしの子供が二つで、自分と三名暮りであつた
んです。それで戦は来たが体験もないし、見たこともないので珍し
がって、みんな出て見たですよ。それから、こつちまで来ていると
いうので大慌てして、壕といつても、穴を掘って上に木を置いて、
それから木の葉っぱを取って来て被う、というそれくらいの壕だっ
たんですよ。

それで朝は荷物を担いで行って、晩は家のある人は家に帰って行
くというようにしていましたが、四月二十九日にこの与座は全部無
くなつたんです。十一時半に火が付きまして、二時半頃までには全
部焼けてしまったんです。それから壕といつてもしつかりした壕
はない、家もないから焼けたトタン板を拾って来て、炊事小屋を石
垣にくっつけて造ったんですよ。そして鍋を拾って来たりまた小さ
い茶碗なんかも寄せ集めて壕に入って、そうして御飯を炊くんで
すよ。

食糧がありませんから、朝は早く起きて、子供を負んぶして五時
には芋掘りに出かけて、六時には帰るようになりますよ。その芋
は全部家に置いてあつたんですが家が焼かれてそれは全部無くなっ
たんですよ。壕に持って行ってあるだけしか食べることができませ
ん。兵隊さんのものは玄米だったんですが、うちのものは白米だっ
たんです。それを兵隊が盗んで行くんですよ。住民のものから、盗

まれても仕方がないので、軍の食糧倉庫へ行って、玄米を少しずつ分けて貰ったりして、少しづつ食べるようにしました。

それから戦争が段々激しくなつたので、兵隊さんに壕を取られたんです。こちから機関銃を撃つから出て行きなさいといって、それで夜の四時頃しか出られなかったから、それから今の糸満中学のうしろにヨナダスクといつてあるんです。あっちへ(墓のあるところか)行って、人間の遺骨を掘り出して、その上に板を置いて、一晩中その板の上におつたんですよ。そうしたらあつちには西海岸から来る艦砲があんまりひどくて、一日おるといつても、いつやられるかもしれないと思つて、ひやひやしておつたんですよ。だから、こちには危いから、明日は、死ぬなら自分たちの今までの壕に帰って死んだ方がいいといつて、また引き返して来て、自分の壕に入つたんですよ。そうして自分たちの壕に入つていたら、また軍が、だったら君たちはもう行くところもない、といつてさんざん怒られて、何故住民が兵隊の邪魔になつて、こちをうるうるしているか、君たちは疎開命令もあつただろう、と怒られましたので、事情があつてできませんでしたから、どうぞ置いて下さい、といつて仲間入りさせて貰つたんですよ。

それから今までの自分の壕の下に、兵隊の炊事の壕があつたので、夜から荷物も運んでその壕に入つたんです。その時兵隊は、この壕は明日は完全にアメリカにやられるんだが、もしその覚悟があるなら入りなさい、といわれましたが、そこに二晩入つていました。その間うちらも水も汲んで来て、薪も持つて来て、兵隊さんたちに飯をつくつて上げておりましたよ。隊長が軍曹だつたと思ひま

川の水の流れの上に、人がこんなにして(まま)浮いていたんですよ、水を飲むとしたら。そうしてこの戦車のところにアメリカの兵隊がいるかどうかと一人は見に行つたんです。誰もいない、というので、じゃこちから歩けるね、といつてまた歩いて、そうしたらアメリカさんは、道の真中に石で囲つて、小屋をつくつて三角ゲートルもつけて寝ておるんですよ。そのそばをわたしたちは通つたんですよ、抜き足さし足で(与座と大里の間は一キロメートルそこそこの近距離である)。

そうしてその部落の中央を歩いて、甘蔗畑に入つたら夜が明ける頃でしたがそこで暗い中に甘蔗を折つてまわりに置いて、それを揮つて子供に上げたりして、そこにおりました。そこへアメリカ兵隊が避難民をさがして来ておるんですよ。その時幸いに子供が泣かなかつたので、わからなかつたと見えて、帰つて行きました。

それでまたこちも駄目だといふことで、場所を変えようということになつて、東の方へ歩いて高良といふところの境界に、元の高嶺御殿といふ原っぱに古い墓があるんですよ。そこを目標にして、行きましたが、そこへ行くといつてまた一昼夜かかつたんですよ(与座から高良部落も一キロメートルに足りないくらい距離である)。その墓へ行つたら立派に掃除されて、避難民が入つたあとがわかるんですよ。それでわたしたちは、こちはいいところだといつて入つたんです。そうして水が飲みたくて堪らないので、上にあがつたらこやし溜めに水が溜つてあつたんです。そこから水を汲んで来て水を飲んで、その水で、持つている米を土瓶に入れて炊いて食べましたが米はこれがお終いで、こちはいいところだから芋を

すが、アメリカはドンドン撃つんですよ、撃つたら横穴があるから、こちには隠れていたんですが、三日目の午後、時間は何時頃かわかりませんが戦車砲撃が込まれてですね、前にいた兵隊十四、五名が、土で入口を閉ざされてみんな埋められていたし、抜け穴も塞がれて出ることができないですよ。

それから兵隊が、あなたがたは言うことをきかないからこんなに閉じ込められるんだといひましたが、兵隊が、土を少しづつ運んでやつと人が通れるくらい出口を開けましたので、わたしたちは八名でありましたが、一人ひとり出ました。

それから、すぐ隣の太里部落にわたしの義理の姉さんの家がありましたので、そこに行きまして、馬小屋の肥料を溜めるタンクがあつて、それをあれたちが掃除して、そこに壕をつくつてありました。それでそこにわたしたちも入つておりました。

その壕は小さいので、二人は別の壕にわかれておりましたが、この二人は水汲みに行くためにアメリカに捕虜になりました。わたしたちはあれたちが捕虜されたことはわかりませんでした。

またそこでも駄目だからというので、自分の部落へ帰つた方がいいといふことで、晩になってから自分の部落へ向かつて歩き出したが、それでまた一昼夜かかりました。照明弾が上つて、その度びに何もかも置いてうつ伏せになつて、また起き上つて歩き出す、それに電線が歩く道に引つ張つてありますので、それにちよつとも触れたら命がありませんからね、そうして歩く道は、不発弾が落ちていて足にさわつたりして、一昼夜かかつて行きまして、その

与座川のところには大きな戦車があつたんですよ。そうして、与座

取つて食べて、ここで辛抱しようね、と話しておりました。そうして四日目だつたんですよ。墓の中は暑いからそとに出ようね、とそとに出て昼寝してました。そとに昼寝していたところは、甘蔗の枯葉で仮小屋を前の人たちがつくつてあつて、そこには食道具もあつたので、わたしたちはここで炊事もしておつたんですよ。

そうして暑いので出て昼寝していたら、四日目の昼過ぎ、出て来い、出て来いといつて来ているんですよ。三名。わたしたちは友軍からアメリカに捕虜されると女はどうされる、男はどうされるからアメリカに捕虜されると絶対命はないものと思ひなさい、と言ひ聞かされていたから、出ても殺される、出なくても殺されるから、みんな殺されるのだから、もう出ないでおこうといつて、みんな伏せて、死んだ振りして誰も動かなかつたんですよ。そうしたら両方から火をつけたんですよ、そのアメリカさんが。そうしても誰も出ないんですよ、死ぬならいっしょに死んだ方がいいといひので。そうしたらこのアメリカさんたちは、言葉はわからないが、大きな声で何か叫びながら、一人ひとり手を引つつかまえてそとへ出すんですよ。そうしたら、友軍は、まだ与座岳にいて機関銃で撃つのです。その弾がヒュウヒュウヒュウ飛んで来るので、立っているものを伏しなさいといひつてわたしたちの背中を押しつけるので、わたしたちの言うように伏せたんですよ。

それから、水が飲みたいだろうといひつた気持ちを見せて、自分の水筒から自分で水を飲んで見せてから、飲みなさいといひがみんな飲まないですよ。毒が入つているといひ心配で。そうしたらまた自分で飲んでからすすめるので、やつと大丈夫だろうと思つてみんな

飲んだんですよ。一人は股に弾が入って歩けないものがいたんですよ。そのアメリカさんが東がわを向いて口笛を吹いたんですよ。そうしたら担架を持った兵隊さんが来るんですよ。そうしてその患者にそれに乗りなさい、というんですよ。ぶるぶる慄えていやだとかぶりを振ったんですよ、あれは(まま)姉さんがいっしょだったの、姉さんに負んぶされて歩いたらあれも強いては担架に乗せなさいんですよ、無理には。わたしたちは歩きしづりました。逃げる考えだから、あれたちを前に歩かして、立ち止ったりしました。そうしたら歩きなさいといって靴で軽く蹴るんですよ。前に進めばわたしたちはおくられて後になったり、あれたちが振り向けば立ち止ったりして、絶えず逃げようとするとするもんですから、あれたちは後は糺にさわったんですよ、わたしたちが持っている着物や釜などを全部取り上げて甘煎畑に捨てたんですよ。そうして、アメリカの兵隊さんが、逃げる鷓鴣を追い廻す格好ですよ。

それからラージといって小さい車がそこにあつたが、それに乗れといったが、乗ろうとしたがみんな心配になって、ぶるぶる慄えているが、アメリカ兵はそこに坐るところがあるから坐りなさいと手で教えるが、六名ともおびえてくっついて坐っていた。どこへつれて行くかね、今日でもうお終いだなと思っていると、目取真(大里村)の収容所へつれられて行った。そうしたら目取真には大きなテントが張られていて大勢の捕虜民がいるんですよ。

その途中一度は東風平へ行ったら、そこに憲兵隊があつたんですよ。そこにわれわれ六人を下したら、アメリカさんのほかには誰もいないんですよ。その憲兵隊に交じって一人だけ沖繩のおじさんが

たしは自分で持てるから気にしないでいいました。

アメリカの兵隊は、捕虜五十名に一人くらい歩いて歩いてたんですよ。そうして歩いて行ったら百名というところに着いたんですよ、そうしたら百名は満員だということで、もっと先の方へ歩きましたよというところになって、志誓屋というところへ行きました。そこには仮の本部があつたんですよ、人家に。そこで二世が出て来て、あなた方は、こっちから先はどこへ行っても家は無い、自分でさがして作らなければ家は無い、こっちから先は自由行動だから、自分の思うところへ行きなさいという命令が下つたんですよ。そういう命令が下つたもんだから、こっちはタンクもあるし、水もあるというところに坐っていたら、大里で先きに擱まえられた二人が芋を取って帰って来ました。

わたしたちが坐っていたのはこれたちの仮小屋の前だったのでそこでいっしょになって、これたちに仲間入りして、木を伐つて来て、枯葉も取つて来て、また仮小屋をつくつて、その仮小屋は敷く板がありませんから、木の葉を地面に敷いたり、枯葉を敷いたり、雨の降る時は牛馬小屋に入れてある肥料の材料にするのと同じようにはじめじめしますよ、それを出して捨てた。そして嫌もないから茅を刈ることもできないし、木の葉を折つて来て、また敷いて夜は寝て、それが六か月くらいつぎました。食糧は配給だったので、配給だから作業に出ないものには、なかつたんですよ。

子持ちでも、作業に出て、芋掘り作業といって、三百名づつ、東風平の富盛まで行つたんですよ。そしてアメリカの小さい袋の二つは出して、一つは自分の戦果と書いて、頭に載せて、自分の二倍の

いたんですよ、そのおじさんに、殺すかどうか訊いて見ようねといってそのおじさんを呼んで事情を訊いたんですよ。そうしたらこのおじさんが、心配しないでいいよ、殺すようなことはしないよ、あなた方は、人数が少いから一休みさせてあるので、また人が来たらどこかへつれて行くから、何も心配することはない、と言われたので、その時から、命は助かりそうだと思つた。

二十分くらい待ったら、真黒い兵隊が、血をだらだらして恐ろしいんですが、その車に乗せて連れられて行つたところが、目取真だつたんですよ。前に話した目取真へ行つたら、捕虜民は大勢いるんですよ。病人は病人別べつにして、そして着いた時は晩頃になっていきましたが、お粥の配給と、また罐詰ちよつとだけ配給を受けて、これは今夜の御飯だから明日からは自分でさがして食べなさいと、二世から注意があつたんですよ。朝なつたら、小さい棒切れをさがして、芋をあさりに行つたんですよ。それで芋をあさつて来て、その芋を溝で洗つて来て、煮て食べたんですよ。朝は、そうしてどうするかねと思つていると、また集合というんですよ。約三百四、五十名だつたでしょう、二列に並べて、もうこれから行く先きは知念だか歩いて行く、みんな歩けるかというんですよ。みんな四、五日も物を食べていないから歩くにも大変なんですよ、子供は泣くのにも声も出なかつたんですよ。男の人もいましたが、わたしたちの持っているものを、アメリカの兵隊が男の人に持てというんですよ。そうして、その男は、わたしたちに詫言るんですよ。あなたがたの荷物を持ってアメリカの兵隊がいがが、わたしは自分の体さえ持ちきれないから、自分で持ちなさいね、とそのおじさんは言うたんですよ。わ

力を出して、食べることですから持つて帰つたんですよ。そうしてまた田植えの手伝いしたり、米の配給を買うといつて、その田を植えたり稲刈りもしました。

ところが配給米はいつになつても無いんですよ、どこへこの米は行つたのか。だから子供たちは、刈りた実を取つた稲の藁を干してあるのから、一粒二粒残っているのを取つてすね。それを干して鉄兜に入れて掲げて炊いて、食べたんですよ。無料で軍作業というものもあつたんですよ、わたしは最初の頃は衰弱して出ることができませんでしたが、移動前の二か月くらいは作業に出たんですよ。その間に一つ二つ道具を捨てて来て生活してました。

それから移動ということになりましたが、高嶺村は軍がつかつて、自分たちの部落には入れないから、今の名城、ビーチのところに収容されてました三和村(旧、摩文仁、喜屋武、真壁)と高嶺は収容されたんですよ。そこで半年くらいいましたが共同作業で、喜屋武あたりの畑を耕してから、また移動といつて、自分の部落へ今度は帰ることができるかと思いましたが、与座と大里は入ることができないといつて、国吉へ移動しました。

国吉に入ってから、後で規格家屋といつて配給があつたんですよ。初めは自分たちでテントで作つて入つていましたが、規格家屋を作るには、与座は男は全部いないから、十名はいたですかね、全部で、十名くらいであつたでしょう、男は。うちをつくるにも、女も同じく作業したんですよ。一つの規格家屋に十四、五名ずつ入れられた。国吉にいたのは何か年だつたかね(ほかの人に呼びかける)二か年くらいいた。国吉にいた間はこっちへ通つて畑仕事をやつた

んですよ。何もないとここにこつこつ畑仕事をした。こっちは黒人部隊がありましたので、薪を取るにも命がけだったんですよ。黒人が追い廻すもんですから。それでこれ等がいつこつちから去って行って、自分の部落に帰って安心して暮すことができるかねえ、といつも思っていたんですよ。黒人が行って白人が来てその後で与座へ帰りました。薪木取る時によく黒人が追い廻されるので大声を上げて逃げました。そうしたら石を投げましたよ、黒人が。

宜野座 シゲ(二十一歳) 軍炊事

こつち与座の高台のところで見たら東風平の記念運動場にB29から赤いのが下りたんですよ。それが弾薬、青いのが食料といていました。あの記念運動場いっぱい下りるのがはつきり見えたんですよ。それで嘉数タキタさんという区長さんが、あなたたちは、もう与座では攻防戦になって戦争が激しくなるから避難しなさいと命令が隊長から下っているからということをお伝えしました。

うちは舅、姑、また姉さんもいたんですよ。兄の奥さん、また次男の奥さん、また子供も。おじいさんが体が弱い人で、咳が非常に出る人であったが「あなたたちはこの戦争で助からないと、後を継ぐ人がいないから、わたくしは一人である。あなたたちはおばあさんといっしょに助かるように軍からの命令だというし早く逃げなさい」といわれた。

それでおじいさんがいわれるように避難することに決まったんですよ。そうしたらうちのお袋さんが下の壕にいたんですよ。それでそ

米ちよつとを持って真壁の山に避難しておったんですよ、こつちも大変激しいんですよ、すぐ自分たちのそばにいる人もやられるんですよ。こつちに綺麗なハンカチがあるねと思って取ったら、こつちに人が埋められておるんですよ、体の半分くらい埋めてですね。そんな死体を踏んで、避難民も兵隊もみんな入り交じって逃げるんですよ、真昼、アメリカが並べて斬るというので。それが珍らしいことに、兵隊の服を着ている人が撃たれるんですよ。真壁の前の小さい山だったんですよ、ここで一晩明かして、そのつぎの日海の方へ水をたよって行ったんですよ、途中の山は真赤に焼けていました。

海に泉のある手前の部落でしたが、新垣あたりの人が、真白い布を棒の先に翻して、それを先頭にして五十名くらいの人が並んで行くんですよ。繃帯で頭を巻いて軍刀を持っている下士官が、あの人は捕虜になっておるよといって、山の陰から見とおったんですよ。もうその時から入られる壕はないですから、木の陰から岩の陰なんかについて、捕虜になって行く人を見て、自分なんかは捕虜にはならない、と思って、それから大渡の壕に行きました。そこには友軍の兵隊たちがいましたが、港川を突破して行くというので、うちは、命だけあればいいという考えでただついて行くんですよ。ついて行く時は、芋葛を土瓶に水で沸かして持っていましたから、それをちよつとずつ飲んでですね。そうしたら、それを友軍の兵隊に取られたんですよ。これがないとこの小さい子供たちを殺すことになるから渡してくれといって取り戻して、海岸を三日歩きました、それから今の牛島中将がいたという崖の下に三昼夜いたんですよ。もう足が歩けないんですよ、うちなんか港川に渡ろうとしても。そ

こも呼んでいっしょに行こうと言ったんですよ。うちの姉嫁が、そうしたら、こんなに大勢一団となっていっしょに歩いたら弾に当たるから今度の場合はめいめいで逃げようということになって、うちなんかは、荷物を纏めて、担いで、スコップも持って、こつちから大里へ、それから国吉の方へ行っただんですよ。

そこへ行く途中、友軍の兵隊なんかごろがっているんですよ、旧高嶺の学校のそばなんかに。そうして国吉越えて、真菜里の田原というところで、ちよつとした壕に十日ばかり避難しておったんですよ。そうしたら国吉のところに戦車がいっぱい来るんですよ。そうしてヤンキーが下りて見えてから、また上ってドンドン撃つんですよ。わたしなんか人がっている壕なんかもドンドン撃たれたんですよ。そしてこつちにもいられないようだがね。と思ったんですが十日ぐらいいいたんですよ。

うちのおばあさんは、大変人情の深い人ですよ、この人が兵隊に煙草上げたんですよ。うちなんか米も少し持っていたんですが、兵隊さんからカンメン包とか煙とかを買って、米と交換して、兵隊もいっしょに小さい壕に入っていたんですよ。うちなんかは、また朝になつたら芋を掘って来た。八時までは来ないんですよ、アメリカ兵は。また五時になったらちゃんと帰るんですよ。トンボ(偵察機)ばかりブウブウ飛んで。そうして十日ばかりこつちにいたんですがね、真菜里から来るんですよ大勢の避難民が。そうして、照屋の人ですが、「アメリカが一人ひとり並べて斬る」といったんですよ。これを聞いてうちなんかもびっくりして、真壁の方へといって、真昼ですよ、太陽は照っていましたが、鎌と、大きな土瓶一つと、

うしたら上の山からアメリカさんは、ワン、トウ、トリーで、手榴弾を投げるんですよ。それで、首里の方でおじいさんでしたが、やられて、うちのおばあさんも破片で怪我をしました。それでおばあさんは、もうこんなにして生きているより死んだ方がいいといっておりました。

註、宜野座さん方は捕虜になって、知念に行かれたようで、その後は与座部落の人たちは、伊敷千代さんの記録と同じく名城、国吉、の生活を経て与座へ戻るので、以下は割愛した。